九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

The effectiveness of Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) for the assessment of the suffering and quality of interpersonal relationships of patients with chronic pain

富岡, 光直

https://hdl.handle.net/2324/4795549

出版情報：九州大学, 2022, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：(c) The Author(s). 2021, corrected publication 2022. Open Access This article is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.

氏　名：　富岡　光直

論文名：　The effectiveness of Pictorial Representation of Illness and Self Measure (PRISM) for the assessment of the suffering and quality of interpersonal relationships of patients with chronic pain

(Pictorial Representation of Illness and Self Measure(PRISM)は慢性疼痛患者の苦悩と対人関係の質を評価するのに有用である)

区　分：　乙

論　文　内　容　の　要　旨

背景：Pictorial Representation of Illness and Self Measure(PRISM)は疾患による患者の苦悩の大きさを視覚化して評価する尺度である。本研究の目的は，PRISMの苦悩の大きさの指標である自己と疾患の距離(Self/Illness Separation: SIS)が，慢性疼痛患者のかかえる負担のどのような側面を反映しているか検討することであった。また，入院治療による患者と医療，重要な他者との関係の変化をPRISMにより縦断的に評価することができるかどうかについても検討した。

方法：参加者：心療内科に外来受診中（28名）あるいは入院中（44名）の72名（平均年齢48.6歳，SD=11.7）の慢性疼痛患者が研究に参加した。

PRISM課題：参加者に右下に黄色の7cmの円をプリントした白色のA4サイズの用紙（図1）を提示した。各被検者には，その用紙が現在の生活空間を表し，黄色の円が参加者「自身」であると想像するよう求めた。参加者に直径5cmの赤色の円盤を渡し，それを彼らの「病気」と考えてもらった。それから参加者に「あなたは今、あなたの生活のどこにあなたの病気を置きますか？」と尋ね，用紙上に配置させた。次に参加者とって重要な人，もの，事を置くように求めた。本研究では12色の直径5cmの円盤から好きな色を選ぶことが可能であった。最後に，現在の医療をどのように感じているか考えさせ，12色の円盤から1つ選び，用紙の上に置くよう求めた。PRISM課題が完了した後で，参加者になぜ医療と重要な他者をそこに置いたのかを尋ねた。重要な事象の中から，入退院時ともに置かれた重要な他者を特定した。「自己」と「病気」の距離（つまりSIS）を，「自己」の円盤の中心と「病気」の円盤の中心との距離(cm)から求めた。同様に，自己と重要な他者との距離（Self/Significant others Separation: SSoS)，自己と医療との距離（Self/Medical care Separation: SMcS)を計測した。

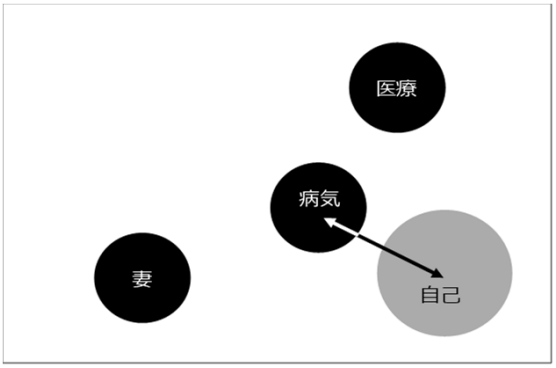

図1　PRISM課題の例
カラーのディスクを白黒に置き換えた。矢印の長さが病気と自己との距離(Self/Illness Separation;SIS)を示している。PRISM = Pictorial Representation of Illness and Self Measure

痛み関連尺度：慢性疼痛患者が抱える抑うつ感の強さを評価するため，Center for Epidemiologic Studies Depression scale（CES-D）を用いた。不安の強さを評価するためState Trait Anxiety Inventory（STAI）を用い，状態不安と特性不安を測定した。疼痛強度（4種類）と疼痛による各種障

害（7領域）の大きさを評価するために簡易疼痛質問票（BPI)を用いた。短縮版マギル痛み質問票（SF-MPQ）により，疼痛経験（感覚領域と感情領域）と現在の痛み，痛みの全体的強度を測定した。痛みの破局的思考尺度（PCS）により3次元（反芻，拡大視，無力感）の破局的思考を測定した。

入院治療：薬物療法と支持的心理療法を中心に実施した。患者の病態を把握するため，ライフレビューを行い，支持的，共感的に対応することで，患者治療者関係の構築を目指した。

手続き：外来患者は外来受診時に，入院患者は入院時にPRISM課題を実施し，痛み関連尺度に回答した。入院患者の内31名は退院時にもPRISMを行った。

結果と考察：測定した疼痛関連の21尺度のうち，10個の尺度がSISと有意(P<.05)に関係していた。これらの10尺度を因子分析し，生活障害，否定的感情，痛み強度の3因子を抽出した。因子分析により算出した因子得点はSISと有意に関係していた（表1)。これらの3分野は，慢性疼痛マネージメントに際して重要な結果変数であることが，臨床実践で示されてきた。このことからSISは，疼痛患者の苦悩を3側面から同時に評価する事のできる，視覚的で統合的な評価法であることが示された。

因　子	相関係数
第１因子　生活障害	-.326**
第２因子　否定的感情	-.420**
第３因子　痛み強度	-.392**

表1　SISと因子分析により同定された3因子との相関

因子得点は因子分析により算出した。相関係数は因子得点とSISにより算出した。
SIS = Self/Illness Separation（自己と病気との距離）

SMcSとSSoSの入院時と退院時の距離をウィルコクソンの符号順位検定にて比較すると，どちらも入院時に比べ退院時で距離が短縮していた(表2）。医療に対するコメントを質的に分析すると，医師に対する信頼感への言及であった。医療と重要な他者に対するコメントと配置された距離との関係から，配置される距離が「自己」に近づくと，それぞれの対象への信頼感や重要度が増加していることが示された。SISの位置は入院時と退院時で有意に変化していなかった。PRISMに病気のディスクに加えて，医療と重要な他者を配置することによって，治療により変化した参加者の対人関係の質を評価する事が可能であった。SISは先行研究[1)]では，縦断的に変化することが示されているが，本研究では示されなかった。入院治療が患者-治療者関係の構築に主眼を置いたものであったからかもしれない。また先行研究では病気のディスクを「あなたの痛み」と限定していたのに対し，本研究では「あなたの病気」と患者の抱えている苦悩全体を評価していた。この方法論的差異により，結果が異なった可能性がある。

	入院時 a) 25 – 75 b)	退院時 a) 25 – 75 b)	Z	*P* c)
SIS　(cm)	3.50 .40 – 7.20	3.25 .80 – 7.00	-1.20	.232
SMcS　(cm)	8.30 4.40 – 12.60	6.00 3.50 – 10.60	-2.54	.011
SSoS　(cm)	7.80 5.90 – 13.80	6.20 4.60 – 11.70	-3.08	.002

表2　入院治療によるPRISM変数の変化

a) 中央値, b) 25-75パーセンタイル値, c) ウィルコクソンの符号付き順位検定
SIS = Self/Illness Separation(自己と病気との距離), SMcS = Self/Medical care Separation(自己と医療との距離), SSoS = Self/Significant others

結論：慢性疼痛患者のSISは，痛みの3側面を反映する統合的評価法であった。従来の疾患のディスクだけを置く方法に，医療と重要な他者を加えることにより，対人関係の質の変化を評価する事ができるかもしれない。

引用文献

[1)]Kassardjian CD, Gardner-Nix J, Dupak K, Barbati J, Lam-McCullock J. Validating PRISM (Pictorial Representation of Illness and Self Measure) as a measure of suffering in chronic non-cancer pain patients. J Pain. 2008;9(12):1135-43.